

ロンサールにおける「ミルトの森（木陰）」
— « fortunata nemora » ou « lugentes campi » —

延 味 能 都

岡山大学ヨーロッパ言語文化研究
第 25 号 別刷
2006 年 3 月

ロンサールにおける「ミルトの森（木陰）」

— « fortunata nemora » ou « lugentes campi » —

延 味 能 都

序

ミルトは現代フランス語では « myrte » と表記され、ラテン語の « myrtus » に対応する灌木である。その主な分布は地中海沿岸から中近東であり、寒さには強くないため、フランスではそれほど広く分布している植物ではなかった。しかし、古代ギリシア・ローマでは聖木の一つとされ、とりわけヴィーナスの聖木・聖花としての地位を得ていた。ヴィーナスは恋の女神としての属性を持っていることから、恋愛、恋人達、恋愛詩などと結びつけられ、古典古代の文学作品では重要な位置を占めている。一方、16世紀の詩人達がしきりに古典古代の作家を模倣し、その成果を自らの作品に取り込んだのは周知のことである。その結果、ミルトは単なる植物としてだけではなく、上記の属性と、それにまつわる古典古代の作家の描写とともに16世紀の詩人達の作品に現れるものとなった。

ところで、ロンサールもまたミルトの木・花を効果的に使用した詩人である。ロンサールの作品では、名詞では « myrte », « myrthe », 形容詞では « myrté », « myrteux », « mirtin » などの形で現れており、クレオール Creole のインデックスで46の出現箇所を確認することができる⁽¹⁾。そしてそれらを Laumonier 版ロンサール全集を用いて確認して行くと、約3分の1があるパターンを伴って使用されていることが判明する⁽²⁾。それらは次のような形で現れるのである。

« sous l'ombre / Des beaux myrtes unbrageus »⁽³⁾

« sous l'ombre des myrtes vers »⁽⁴⁾

« Sous un myrte esgaré »⁽⁵⁾

(1) Creole, A.E., *A word-index to the poetic works of Ronsard*, 2 vol., W.S. Maney and son LTD., Leeds England, 1972.

(2) 本稿での引用は全て *Œuvres Complètes de Ronsard*, éd. Laumonier, S.T.F.M., Librairie NIZET, 1937-1990. から行う。

(3) T.5, p.255-p.256, v.66-v.67.

(4) T.6, p.28, v.14.

(5) T.6, p.34, v.48.

- « De sous les myrtes verds » ⁽⁶⁾
- « sous l'amoureux ombrage / Des Myrthes » ⁽⁷⁾
- « sous les ombrages / Des myrthes Paphiens » ⁽⁸⁾
- « Dessous la grand forest des myrthes ombrageux » ⁽⁹⁾
- « sous les myrthes » ⁽¹⁰⁾
- « dessous les bois myrthés » ⁽¹¹⁾
- « Sous les Myrtes » ⁽¹²⁾
- « sous les branches Myrtines » ⁽¹³⁾
- « sous les ombres Myrtines » ⁽¹⁴⁾
- « dessous l'ombre Myrtinne » ⁽¹⁵⁾
- « Entre les bois myrtés » ⁽¹⁶⁾
- « Entre les Myrthes verds » ⁽¹⁷⁾
- « Par les ombres Myrtheux » ⁽¹⁸⁾

このようによく似たパターンが現れる場合、その背後に古典古代作家からの模倣と、ある概念を伴っている場合が多いのだが、これらの言い回しにもやはり下敷きになっているものがある。

これらは主にティブルスとウェルギリウスをその源としている。Laumonier 版では全てでは無いにしても、上記のうちのかなりのものに注釈が付加されている。たとえば、「sous l'ombre Des beaux myrtes unbrageus」とは「Le bois des amoureux dans les Enfers païens.」⁽¹⁹⁾であり、「異教の冥界にある恋人達の森」と解説される。しかし一方では、「sous l'ombre des myrtes vers」は「Dans le bois réservé aux poètes de l'amour.」⁽²⁰⁾とし「恋愛詩人達の

(6) T.10, p.111, v.42.

(7) T.10, p.243, v.108-v.109.

(8) T.12, p.221, v.131-v.132.

(9) T.12, p.269, v.289.

(10) T.12, p.273, v.378, variantes 78-87.

(11) T.14, p.118, v.109.

(12) T.17, p.202, v.46, variantes 84-87.

(13) T.17, p.236, v.21.

(14) T.18, p.41, v.113.

(15) T.18, p.134, v.114.

(16) T.5, p.250, v.151.

(17) T.18, p.255, v.68.

(18) T.17, p.266, v.10.

(19) T.5, p.256, note 1.

(20) T.6, p.28, note 4.

ための森」でもある。「De sous les myrtes verts」は「c'est le bois réservé dans les Champs Elysées aux ombres des grands amoureux」²¹⁾ というように「エリュシウムの野にあって、激しい恋に死んだ者達のための森」ということになっており、各注釈の間では微妙な違いがある。さらに「sous les ombrages Des myrthes Paphiens」の部分については「[...] Il s'agit de la forêt de myrtes, où Virgile a rangé les victimes de l'amour-passion (*En.* VI, 442 sqq). R dira encore dans un sonnet à Hélène : Par les ombres myrteux je prendrai mon repos.」²²⁾ という、ウェルギリウスの一節へ言及するかなり具体的な注が付いており、別のソネへの送irimも付されている。このソネは「Quand vous serez bien vieille」で始まる有名なソネで、このソネには「Par les ombres Myrtheux」というやはり同じような表現がでてくるからである。しかしこの送irim先の表現にはさらに「Sous les ombrages de la forêt de myrtes, où se tenaient les grands amoureux aux Champs Élysées. [...]」²³⁾ という、やはり微妙に異なる注が与えられている。

このように曖昧で、堂々巡りのように今ひとつ要領を得ない注釈が出てくる背後には、ロンサルに現れた言い回しが担う概念が全て同じというわけではないこともある。しかし一方では、典拠となったとされる古典古代の作品との関連が詰め切れていないのではないかと思わせるものがある。本稿では典拠となったローマ古典古代の作品とロンサールの該当部分との関連を整理しながら、この注釈の問題を検討してみたい²⁴⁾。

1 まず古典古代作家の「myrtus」から

古代ローマ作家の作品には、著しく多いとはいえないまでも、調べた限りでは、「myrtus」の語（活用形含む）がかなりの数で現れている。それらの作家達の名前と作品をあげれば以下ようになる。ローマの大貴族で料理の本を残したアピキウス Apicius (*De Re Coquinaria*), 農業についての書を残した大カトー Marcus Polcius Cato (*De Agri Cultura*), カトゥルス Gaius Valerius Catullus (*Carmina*), 医学書を残しているケルスス Aulus Cornelius Celsus (*De Medicina*), 数学者でもあるコルメラ Lucius Junius Moderatus Columella (*De Re Rustica*), フロントー Marcus Cornelius Fronto (*Ad M. Caesarem, Laudes Neglegentiae*), グラッティウス Nemesianus Grattius (*Cyrenegetica*), ホラティウス Quintus Horatius Flaccus (*Carmina*), ラルグス Scribonius Largus (*Compositiones*), マルティアリス Marcus

²¹⁾ T.10, p.111, note 3.

²²⁾ T.12, p.221, note 4.

²³⁾ T.17, p.266, note 2.

²⁴⁾ 本研究は科学研究費補助金を受けた「ロンサールの作品に現れる同・類似表現の考察と注釈再考」、基盤研究 (C)、課題番号 17520170 の研究成果の一部である。

Valerius Martialis(*Epigrammata*), 地理の本を残したメラ Pomponius Mela(*De Chorographia*), オウイディウス Publius Ovidius Naso(*Amores*, *Ars Amatoria*, *Fasti*, *Metamorphoseon*), ペトロニウス Petronius(*Satyricon*), イソップ風寓話を残したパエドルス Gaius Julius Phaedrus(*Fabulae Aesopiae*), 喜劇作者のプラウトゥス T. Maccius Plautus(*Vidularia*), 大プリニウス Gaius Plinius Secundus (*Naturalis Historia*), ホプリニウス Gaius Plinius Caecilius Secundus (*Epistulae*), ホラティウスの注解を残したボルビュリオ Pomponius Porphyrio(*Commentum in Horati Carmina*), 雄弁術の教科書を書いたクインティリアヌス Marcus Fabius Quintilianus(*Institutio Oratoria*), セネカ Lucius Annaeus Seneca(*Oedipus*), 裕福な学問愛好家セレス Quintus Serenus Sammonicus (*Liber Medicinalis*), ローマ後期の文法家で膨大なウェルギリウス注解を書いたセルウィウス Servius(*Commentarii in Vergilii Aeneidos libros*, *Commentarii in Vergilii Bucolica*, *Commentarii in Vergilii Georgica*), スタティウス Publius Papinius Statius(*Silvae*, *Thebais*), ティブルス Albius Tibullus(*Carmina*, *Elegiae*), ヴァレリウス・フラックス Valerius Flaccus(*Argonautica*, *Facta et Dicta Memorabilia*), 作者不詳とされるが Vergiliana としてまとめられた詩集の一編 (*Culex*)⁽²⁵⁾, ウェルギリウス Publius Vergilius Maro(*Aeneis*, *Bucolica*, *Georgica*)。以上のように、ミルトの語は複数の作品、複数の作家に現れている。こうした作家の中で、ロンサルが主にその発想を汲み出したのは、とりわけ、ホラティウス、オウイディウス、ティブルス、そしてウェルギリウスである⁽²⁶⁾。ここではこの4人の作家の記述を検討し、得られる情報をまとめることから始めたい。

ホラティウスでは7カ所でミルトについての言及を見つけることができる。ミルトが月桂樹と並んで聖木であること、さらにはヴィーナスの聖花であることや、そのミルトで頭を飾る習慣を示す記述がある⁽²⁷⁾。また、ミルトが常春藤(きずた)と共に若い女性を示す隠喩として現れ、そこではミルトの花が栗色であることが示されている⁽²⁸⁾。素朴な美しさを賛

25 ウェルギリウス風の作品集であるが、ウェルギリウス作とする説もある。

26 本稿では古代作家の名前の欧文表記は、テキストに主として Les Belles Lettres 版を使用しているため、基本的にフランス語表記を使用する。ラテン語引用文に関してはなるべく仏語訳か英語訳を付すようにし、訳文はイタリックで示した。

27 Horace, *Carmina*, III, IV, 18-19, «ut premerer sacra / lauroque conlataque myrto», «le laurier et le myrte sacrés revêtir»; III, XXIII, 13-16, «[...] ; te nihil attinet / temptare multa caede bidentium / parvos coronantem marino / rore deos fragillique myrto», «mais toi, ce n'est pas ton affaire de massacrer force bêtes dans leur deuxième année pour solliciter les humbles dieux que tu couronnes de romarin et de myrte cassant.»; I, IV, 9, «Nunc decet aut viridi nitidum caput impedire myrto», «Maintenant il convient d'enlacer nos chevelures luisantes avec le myrte vert [...]»; II, VII, 24-25, «Quis udo / deproperare apio coronas / curatve myrto?», «Qui s'occupe de tresser vivement des couronnes avec l'ache humide ou le myrte?».

28 Horace, *Carmina*, I, XXV, 18, «laeta quod pubes hedera virenti / gaudeat pulla magis atque myrto», «parce que la florissante jeunesse se réjouit davantage du lierre verdoyant et du myrte sombre[...]».

美する例として用いられる一方で、荒れた畠をその芳香で満たす花という「芳香」に注目した役割で使用されてもいる⁽²⁹⁾。ミルトの持つ芳香は好ましいものとして受け止められており、戦いなどの場面ではなく、平穏な場面の描写に現れている。しかし、これらの記述から得られる情報はそれほど特殊なものではない。一つは月桂樹と並んで聖木・聖花としての地位を持つこと、恋の女神ヴィーナスの聖花であること、さらにはミルトが頭などを飾る飾りとして用いられることである。

オウィディウスからはもう少しミルトに関して多くの情報が得られる。まず、*Ars amatoria* ではミルトが髪や頭を飾るために使用されるものであることが二カ所から読みとれる⁽³⁰⁾。他の出現箇所からはミルトと女神ヴィーナスとの関係を読みとることができる。とりわけこの部分に関しては、「soubz les ombrages / Des myrthes Paphiens」⁽³¹⁾ という表現の原型と考えて良いだろう⁽³²⁾。さらにミルトの芳香についての記述がある⁽³³⁾。*Amores* ではミルトと髪飾りの関連が記述されている⁽³⁴⁾。同様な記述が別の場面にもあるが、ここではミルトが寒さに弱い木であるという情報も得ることができる⁽³⁵⁾。さらにミルトが本来はヴィーナスの聖木であることを踏まえた上で詩神ムーサと関連して恋愛詩を表す例もオウィディウスには認めることができる⁽³⁶⁾。この詩神ムーサとの関連は他の場面にもあり、詩人の前に現れたムーサは右手にミルトの枝を持っていることによって恋愛詩との関連を暗

29 Horace, *Carmina*, I, XXXVIII, 5-7, «simplici myrto nihil adlabores /sedulus, curo : neque te ministrum dedecet myrtus neque me sub arta / vite bibentem.», - *Que l'effort de ton zèle n'ajoute rien, je le veux, au simple myrte ; le myrte n'est indigne ni de toi qui me sers ni de moi buvant sous un berceau de vigne.* ; II, XV, 6, «tum violaria et / myrtus et omnis copia narium / spargent olivetis odorem», - *Alors le parterres de violettes et les myrtes et tout le trésor du l'odorat répandront des parfums là [...]* .

30 Ovide, *Ars Amatoria*, II, 734, (myrteus), - *Sertaque odoratae myrtea ferte comae.* -, « *sur ma chevelure parfumée posez une couronne de myrte.* » ; III, 53, « *Dixit et e myrto (myrto nam vincita capillos / Constiterat) folium granaque pauca dedit.* » -, « *Elle dit, et du myrte qui la couronnait lorsqu'elle s'était dressée devant moi, elle me donna une feuille et quelques grains.* »

31 T.12, p.221, v.131-v.132.

32 Ovide, *Ars Amatoria*, III, 181, « *Hic Paphias myrtos, hic purpureas amethystos, Albentesve rosas.* », - *une autre les myrtes de Paphos, une troisième l'améthyste violette ou les roses pâlisantes* ». ヴィーナスはパピボス島に神殿を持っていた。

33 Ovide, *Ars Amatoria*, III, 690, « *Ros maris et lauri nigraque myrtus olent* », - *le romarin, le laurier, le myrte sombre parfument l'air* .

34 Ovide, *Amores*, I, II, 23, « *necte comam myrto, maternas iunge columbas;* », - *Couronne de myrtes ta chevelure, attelle les colombes de ta mère* .

35 Ovide, *Amores*, I, XV, 37, « *sustineamque coma metuentem frigora myrtum* », - *que ma tête soit couronnée du myrte qui craint le froid* .

36 Ovide, *Amores*, I, I, 29, « *Cingere litorea flaventia tempora myrto, /Musa, per undenos emodulanda pedes!* », - *Muse des myrtes qui fleurissent sur les rivages, ceins tous temps aux cheveux blonds, toi dont les chants exigent onze pieds.* .

示している⁽³⁷⁾。*Metamorphoseon* ではミルトが二色の実をつけるという植物的な特徴を知ることが出来る⁽³⁸⁾。

オウィディウスの *Fasti* ではキュテラの女神が「私」の額にミルトの枝で触れるのだが、このキュテラの女神とはヴィーナスのことであり、やはりミルトと恋愛との関係が示されている⁽³⁹⁾。ウナリア祭をヴィーナスの祭りとして述べたくだりでもミルトはやはり登場している⁽⁴⁰⁾。同じように、ヴィーナス崇拝を意味する儀式的記述の場面で、女達が沐浴しなければならないことと、ミルトとヴィーナスが結びつけられる理由が語られているが、実はここで重要な情報が手に入る。女達は「緑のミルトの下で」体を洗わなければならないのである⁽⁴¹⁾。この「緑のミルトの下で」という表現はロンサルにも二度ほど出現するが、Laumonier 版ではどちらも言及がない。ロンサルは、形としては、このオウィディウスの表現を利用した可能性が高い。ホラティウス、ティブルス、ウェルギリウスにはこうした形で表現は出てこないのである。

次にティブルスだが、ティブルスでは *myrtus* の語が出てくる場所は三カ所しかない。しかし、そのうちの一つは非常に重要な場面で出現する。まず、一つはアポロンを絶世の美少年として描写する場面で髪の毛の色（栗色）を表すために使用されている⁽⁴²⁾。二つ目のミ

37 Ovide, *Amores*, III, l.34, (*myrteus*), « an in dextra myrtea virga fuit », « ou elle tenait à la main une branche de myrte ».

38 Ovide, *Metamorphoseon*, X, 98, « bicolor myrtus », « le myrte à la double couleur » ; XI, 234, « myrtea silva subest bicoloribus obsita baxis. », « près de là est un bois de myrtes chargé de baies de deux couleurs ». 「ローマ恋愛詩人集」、中山恒夫編訳、アウロラ叢書、国文社、1985 では、それぞれ「緑と黒の実をつける天人花」、「近くに天人花の木立があって、緑と黒の二色の実をつけている」の訳が与えられ、訳として内容が補われているが、原文ではそこまでの記述はない。

39 Ovide, *Fasti*, IV, 15, « mota Cytheriaca leviter mea tempora myrto / contigit », « Émue, elle effleura légèrement mes tempes avec du myrte de Cythère ». キュテラの女神については「祭州」、高橋宏幸訳、叢書アレクサンドリア図書館第一巻、国文社、初版1994、p.138、注7：「ウェヌス女神。キュテラ島は、海に生まれたウェヌスが最初にたどり着いた島」。

40 Ovide, *Fasti*, IV, 869, « cumque sua dominae date grata sisymbria myrto / tectaque composita iuncea vincla rosa », « Offrez à votre patronne son myrte avec la menthe qu'elle aime, ainsi que des guirlandes de jonc tressées de roses ».

41 Ovide, *Fasti*, IV, 139, « nunc alii flores, nunc nova danda rosa est. / vos quoque sub viridi myrto iubet ipsa lavari. », « C'est le moment de remplacer les fleurs, le moment de renouveler les roses. A vous aussi, elle vous prescrit de vous baigner, couronnées de myrte vert » ; IV, 143, « sensit et opposita texit sua corpora myrto : », « Elle s'en aperçut et dissimula son corps derrière un écran de myrte ».

42 T.6, p.28, v.14, « sous l'ombre des myrtes vers » ; l.10, p.111, v.42, « De sous les myrtes verts ».

43 Tibulle, *Carmina*, III, IV, 28, « Stillabat Syrio myrtea rore coma », « ses cheveux foncés comme le myrte distillaient la rosée des parfums de Syrie ». 「シュリアの露」 - *Syrius ros* - は香水の一種、甘松香油（中山恒夫訳注を参照）。通常、ティブルス詩集の3巻としてまとめられる詩編は、実際はティブルスの作ではなく、ティブルスが編んでいたメッセルラのサロンの他の詩人達の詩を集めたものである。この詩編はその中の「リュグダムス詩集」Lygdamusに収録されている第4歌である。「ローマ恋愛詩人集」、中山恒夫編訳、アウロラ叢書、国文社、1985、「ティブルス詩集」の解説を参照。

ルトの語は、ラレース神に戦いを無くすように願う祈りに続く一節で現れる⁽⁴⁴⁾。この一節の後では、平和なときには恋が盛んになるという話へ発展して行くため⁽⁴⁵⁾、このミルトがやはり恋愛に関係していることがわかる。

最後はいわゆる極楽の描写へ関わる部分で出現する⁽⁴⁶⁾。ティブルスはその詩集第1巻第3歌で、遠征の途中で病に倒れた詩人という設定で歌っている。病に倒れた詩人をおいて、将軍であり、ティブルスの保護者でもあるメッセルラは出発して行こうとしている。戦いへの遠征の途中で、しかも病で置き去りにされて死すのだから、非業の死ということになるのだが⁽⁴⁷⁾、ティブルスは自分が死んだ時の墓碑銘を示し、その後に、

Sed me, quod facilis tenero sum semper Amori,
ipsa Venus campos ducet in Elysios.
Hic choreae cantusque vigent, passimque vagantes
dulce sonant tenui gutture carmen aves ;
fert casiam non culta seges, totosque per agros
flore odoratis terra benigna rosis ;
ac juvenum series teneris immixta puellis
ludit, et adsidue proelia miscet Amor.
Illic est, cuicumque rapax Mors venit amanti,
et gerit insigni myrtea sarta coma.⁽⁴⁸⁾

44 ラレースはローマの下級神であり、四つ角、家と家族、道路、海路、国家など、さまざまな意味での保護の神。Tibulle, *Elegiae*, I, X, 27-28, « myrtoque canistra / Vincita geram, myrto vinctus et ipse caput. », « je porterai une corbeille enguirlandée de myrte, ayant aussi des guirlandes de myrte sur la tête ».

45 Tibulle, *Elegiae*, I, X, 53, « Sed Veneris tunc bella calent », « Mais alors les luttes de Vénus sont chaudes ».

46 ここでは「極楽」としたが、エリュージウム、エリュージオン、エリュージオンの野、campi Elysii, Champs Élysées、と作品や言語によってさまざまな表記がなされるが、示すところは同じである。

47 『ローマ恋愛詩人集』、中山恒夫編訳、アウロラ叢書、国文社、1985。『ティブルス詩集』、第1巻第3歌「遠征途上病に病に倒れ」。メッセルラとは Marcus Valerius Messala Corvinus のことで雄弁家にしてローマの将軍であった。ティブルスやオウィディウスの属する詩人グループの保護者であった。ティブルスの病に関しては同訳書、p.61, 注(1)：「メッセルラが東方に遠征したときに、ティブルスも随行したが、途中病に倒れて、コルキューラ島に残った、という設定。この遠征の記録は他に皆無で、真相は分からない」。

48 Tibulle, *Elegiae*, I, 3, 57-66, « Mais moi, qui suis toujours docile au tendre Amour, Vénus elle-même me conduira aux Champs Élyséens. Là règnent les danses et les chants, et, voltigeant de tous côtés, des oiseaux font résonner les doux accents de leur gosier délicat ; le cinnamome y pousse sans culture, et dans toute la campagne la terre complaisante est fleurie de roses ambaumées ; et de longues files de jeunes gens mêlés aux délicates jeunes filles se jouent, et Amour renouvelle sans cesse leur escarmouches. Là se trouvent tous les amants qu'a surpris la Mort avide, et des couronnes de myrte ornent leur chevelure ».

と続けるのである。ティブルスは、自分はいつも恋の神アモルに従順だから、ヴィーナス自らに導かれて、楽園であるエリュシウムの野に行くことになるだろうという。このエリュシウムの野 *campi Elysii* とは⁽⁴⁹⁾、踊りと歌で活気に溢れ、鳥たちがいたところで歌い、野原にはバラが咲き乱れ、若者達が乙女達と戯れ、絶えずアモルが戦をする楽園のことである。アモルは恋の神であり、そのアモルが絶えず仕掛ける戦とは武器を取っての戦ではなく、恋のことである。このような何の悩みも無い、いわゆる「黄金の時代」の描写にも通じるこの楽園の描写の中にミルトは出現する。そして、この「楽園」には、恋をしている時に死に見舞われたものたちがおり、彼らは髪にミルトの冠 *«mirtea sarta»* をつけているのである。恋の最中に死んだ者の印としてミルトが使われているのは、もちろん、ヴィーナスがミルトを聖木としているからである。このヴィーナスとの関係を背景に恋人たちとミルトが結びつくのだ。また、ここで野を埋めるバラもヴィーナスに捧げられた花である。つまり、ティブルスの描いたエリュシウムの野は、死んだ者達が幸福に暮らす楽園であり、とりわけ死した恋人たちに焦点をあてた楽園なのである。こうしてミルトは、恋人達の頭部を飾るという役割によって、ティブルスの描く極楽である *campi Elysii*、死後の（とりわけ恋人たちの）幸福な世界を象徴するものとなっている。

最後にウェルギリウスに現れるミルトが残っているが、ウェルギリウスにおけるミルトの使用は、これまで見てきた詩人の中でもっとも多く、ロンサールの作品との関連では特に重要である。ウェルギリウスでは、ミルトが寒さに弱いこと、水辺を好むこと、その実が赤いこと、楸の柄としての実用性などに関わる記述がある⁽⁵⁰⁾。さらにはミルトが女神ミネルヴァや、もちろん、ヴィーナスとの関連があることを示す記述も現れる⁽⁵¹⁾。ホラティウス、オウィ

49 フランス語では *Champs Élysées*。

50 Virgile, *Bucolica*, VII, 6, - *huc mihi, dum teneras defendo a frigore myrtos*, -, - *En cet endroit, tandis que j'abritais du froid mes tendres myrtes[...]* - ; *Georgica*, IV, 124, - *amantis litora myrtos*, -, - *les myrtes amis des rivages* - ; I, 306, - *tum stringere tempus / et lauri bacas oleamque cruentaque myrta*, -, - *c'est aussi le moment de cueillir les glands du chêne, les baies du laurier, l'olive et les fruits rouge-sang du myrte* - ; II, 447, - *at myrtus ualidis hastilibus et bona bello / cornus* -, - *tandis que le myrte est riche en robustes hampes, ainsi que le cornouiller propre à la guerre* - ; - ; *Aeneis*, III, 23, - *densis hastilibus horrida myrtus* -, - *un myrte hérissé en un buisson de lances* -. ここでミルトが楸の柄を繁らせているのは、ポリュドーロスを刺し殺した楸の柄に使われていたミルトが芽吹いて育ったものだからである。

51 Virgile, *Aeneis*, VII, 817 (fin), - *pastoralem praefixa cuspe myrtum* -, - *le myrte des pâtres armé d'un fer de lance* -. 杖を持っているのはここではミネルヴァ女神である。 *Georgica*, II, 64, - *solido Paphiae de robore myrtus* -, - *les myrtes de Paphos à celui de la souche massive* - ; *Bucolica*, VII, 62-64, - *formosae myrtus Veneri, sua laurea Phoebos, Phyllis amat corylos ; illas dum Phyllis amabit, nec myrtus uincet corylos, nec laurea Phoebi* -, - *le myrte, celui de la belle Vénus ; le laurier appartient à Phébus ; Phyllis aime les coudriers ; tant que Phyllis les aimera, ni le myrte, ni le laurier de Phébus ne l'emportera sur les coudriers* -.

ディウス、ティブルスの3人の詩人で共通してミルトは頭、額、髻、髪を飾るという役割を持っていたが、ウェルギリウスでも同じ役割を持っているのだ⁽⁵²⁾。

そして、最後になったが、ウェルギリウスの『アエネーイス』第6巻の冥府行に、ミルトの森に関する記述がある。第6巻ではアエネーアースはアポロンの巫女をクーマエに訪ねてアポロンの予言を得る。その時、アエネーアースは冥界にいる亡き父と会わせてくれるように巫女に頼むのである。巫女は冥界に降りるためには金葉の枝をまず手に入れなければならぬことを告げ、首尾良く金葉の枝を手に入れたアエネーアースは巫女を道案内にして冥界へと降りて行く。冥界の渡し守であるカロンの守るステュクス河を渡り、番犬のケルベロスの前も巫女の力により通過し、アエネーアースはさらに進んで行く。ここで物語は「悲嘆の野」- *lugentes campi* - の描写に入る。「悲嘆の野」には愛ゆえに身を滅ぼした者達がひっそりと暮らす森がある。

Hic quos durus amor crudeli tabe peredii
secreti celant calles et myrtea circum
silua tegit; curae non ipsa in morte relinquunt.⁽⁵³⁾

この部分に「ミルトの森」- *myrtea silva* - が現れているのだ。

さて、ここが「悲嘆の野」と呼ばれているように、ここにいる者達は、死後もなお愛の苦しみを引きずっている。「悲嘆の野」にはバエドラー、プロクリス、エリビューレー、エウアドネー、パーシバエーなどが姿を見せているが⁽⁵⁴⁾、そこにはアイネーイスの恋人であったカルタゴの女王ディードーもいた。嵐によってカルタゴに流れ着いたアエネーアースはディードーと結ばれるが、ゼウスの命令により、ディードーを棄ててカルタゴを離れたのである。その結果、ディードーは自殺することとなった。そのディードーがこの「悲嘆の野」にいたのである。アエネーアースは使いから知らせを受けてディードーの死を知ってはいた

52 Virgile, *Aeneis*, V, 72. - *Sic fatus uelut materna tempora myrto.* -, - *Ayant ainsi parlé, il voile ses tempes du myrte maternel* - ; *Georgica*, I, 28, - *cingens materna tempora myrto*; -, - *en te couronnant les tempes du myrte maternel* -

53 Virgile, *Aeneis*, VI, 443 (*myrteus*) -, - *Là ceux que le dur amour a consumés en cruelles langueurs trouvent asile sur des sentiers secrets ; des buissons de myrte tout autour les protègent ; leur peine, aux bras mêmes de la mort, ne les quitte.* -

54 バエドラーはヒッポリュトスに言い寄ったが拒絶され、奸計によって彼を死に至らしめるが、後に後悔して自殺する。プロクリスは夫のケバロスに誤って殺される。エリビューレーは意見の相違が原因で夫のアムピアラーオスに殺された。エウアドネーはゼウスの雷霆に打たれて死んだ夫のカバネウスの火葬壇に飛び込んで死んでいる。

が、彼女の死の原因が自分であることを知り、涙ながらに出帆が不本意なものであったことを訴える。だがディードーは頑なな態度を崩さず、憎しみを見せたまま、最初の夫であったシュカエウスの待っている木陰へと逃げて行く⁵⁵⁾。

ここまで、ホラティウス、オウィディウス、ティブルスと見てきたが、「ミルトの森」、ミルトの木陰」に関わるような記述は実はウェルギリウスのこの「悲嘆の野」の部分にしかない。前述の、オウィディウスの「緑のミルテの下で」を加えることが出来るが、これはエピソードとしてはあまりに弱い。すると「ミルトの森（木陰）」の指し示す候補としては、この「悲嘆の野」がもっとも適合するのだが、ここはティブルスが描いた楽園とは明らかに異なる。ここでは愛が原因で非業の死を遂げた者が行き着き、しかもなおその苦悩と苦しみを引きずる、まさしく「悲嘆の野」= *lugentes campi* なのである。

ところで、この「アエネーイス」にはまだ続きがある。「悲嘆の野」を後にしたアエネーアースは巫女の案内でさらに奥に進む。そして道が二股にわかれているところに着くと巫女がその場所を説明する。

Hic locus est, partis ubi se uia findit in ambas :
dextera quae Ditis magni sub moenia tendit,
hac iter Elysium nobis ; at laeua malorum
exercet poenas et ad impia Tartara mittit. ⁵⁶⁾

右の道はディース（プルートーンあるいはハーデース）の城壁の下を通過してエリュシウムへ至り、左の道は情け容赦のないタルタロスに至る。明らかにエリュシウム（極楽）は別に存在しているのである。つまり、ウェルギリウスでは死後の恋人たちが集う場所は苦しみの残る「悲嘆の野」なのであり、いわゆる極楽（エリュシウム）とは別の場所であり、しかも決してティブルスが描くような楽園ではないのである。

アエネーアースはもちろんエリュシウム（= *Campi Elysii*, *Champs Élysées*）へ至る道

55 「アエネーイス」、泉井久之助訳、岩波文庫では「金雀児の森の陰」となっている。もちろんミルト（金雀児）の森であるから、その木陰はミルトの木陰であろうが、原文では *myrtus* の語は無い。Belles Lettres 版のフランス語訳でももちろんミルトの語はない。Virgile, *Aeneïs*, VI, 472-473, «*refugit / in nemus umbriferum*», «*s'enfuit dans le bois plein d'ombre*», *refugit* の主語はディードー。

56 Virgile, *Aeneïs*, VI, 540-543, «*Voici l'endroit où la route se divise vers deux côtés : le chemin de droite conduit sous les murs du noble Dis, c'est par là que nous irons à l'Élysée ; à gauche, c'est le chemin des justes châtiménts : il mène dans l'impitoyable Tartare.*»

を選ぶ。亡き父のいるところがエリュシウムだからである⁽⁵⁷⁾。そして一行が到着したのは「幸運の杜」と呼ばれる場所(エリュシウム)である⁽⁵⁸⁾。ウェルギリウスが描いたその楽園は祝福をうけた人々の場所であり、野は他の場所よりも厚いエーテル「aether」に包まれ、紫の光のもと、この場所だけの太陽や星がある。草原では競技を楽しむ人もいれば、踊ったり、音楽に興じる人々もいる。そこにはオルフェウスや、英雄達もいる。しかし英雄達の棺は地面に突き立てられたままであり、軍馬は野原で草を食んでいる。他にも、食事をし、月桂樹の林で勝利の歌を歌っている人々もいる。そこにいる人々は祖国のために戦い負傷した者、生前の振る舞いを認められた祭司達、工夫や発見で世の役に立った者、何らかの功績を挙げて名を残した人々であり、これらの人々は聖化された印に髪を白いリボン「nivea vitta」で巻いている⁽⁵⁹⁾。ウェルギリウスの描く楽園とはこういう場所である。ところが、このウェルギリウスの「幸運の杜」の描写には月桂樹は出てくるが⁽⁶⁰⁾、ミルトは出てこないのである。この地の人々が勝利の歌を喜びに歌うのは月桂樹の林であり、頭部を飾る印は白いリボンであってミルトではないのだ。

これまでミルトを中心にホラティウス、オウィディウス、ティブルス、ウェルギリウスの例を見てきたが、そこからミルトの担う意味をまとめることができる。まず、ミルトは寒さに弱い樹木であり、芳香は好ましいものと受け止められており、その花は素朴だが貧相ではない。幹は棺の柄として利用される。また、2色の実をつける場合がある。次に聖木・聖花であり、神と関係が深い。神とは詩神ムーサ、ミネルヴァ女神、などとも関連があるが、とりわけミルトは恋の女神ヴィーナスと結びつく。このヴィーナス女神との関係により、恋愛や恋愛詩という詩のジャンルを表す場合がある。さらにミルトを額、頭、髪、髪などに巻いて飾りとすることがあり、そこには自ずから恋やヴィーナス女神との関係が含まれ、恋や恋人達を暗示する。

ロンサールの言い回しで2度出てくる「緑のミルト」については Laumonier 版では典拠に関する注釈は無いが、この表現がホラティウス、ティブルス、ウェルギリウスにも無いことから、ロンサルはオウィディウスにある表現を利用した可能性が高い。

ミルトと極楽との関係だが、まさに極楽と呼べる場所でミルトが出現するのはティブルス

57 Virgile, *Aeneis*, VI, 743-744. « Exinde per amplum mittimur Elysium et pauci laeta arua tenemus », « Ensuite nous sommes envoyés dans les espaces de l'Élysée ; nous sommes quelques-uns à demeurer dans ces champs heureux [...] ».

58 Virgile, *Aeneis*, VI, 638 sqq. « [...] devenere locos laetos et amoena virecta / fortunatorum nemorum sedesque beatas. », « [...] ils parvinrent enfin aux espaces riants, aux aimables prairies des bois fortunés, les demeures bienheureuses. »

59 Virgile, *Aeneis*, VI, 665.

60 Virgile, *Aeneis*, VI, 658.

の極楽の描写のみである。この極楽は原詩のコンテキストからいわれるエリュシウム（＝Campi Elysii, Champs Élysées）であることが明らかで、しかもヴィーナス女神自らが詩人を連れて行く場所であるため、死後に恋や恋人達を受け入れている幸福な場所として考えることができる。しかしここにはロンサールに出てくるような「ミルトの森（本陰）」に相当する表現はない。一方、ウェルギリウスで描写される死後の恋人達のための場所は、はっきりと「ミルトの森」であることが記述されている。だが、そこにいるのは前世の恋の苦悩をひきずる者達であり、彼らは決して幸福ではなく、ここは楽園ではなく「悲嘆の野」と呼ばれるにふさわしい場所なのである。また、ウェルギリウスにはいわゆる極楽、エリュシウムに相当する「幸運の杜」と呼ばれる死後の楽園の記述が別にあるが、そこでは月桂樹はでてくるがミルトの木は出てこない。

最後にホメーロスについて一言触れておく。ホメーロスの『オデュッセイア』にも冥府行があり、ウェルギリウスが『アエネイス』を執筆するに当たって、前半の第6巻まではホメーロスの『オデュッセイア』を参考にしたとされており、「悲嘆の野」も「幸運の杜」も第6巻にその記述があるからだ。だが、冥府行がテーマになっている『オデュッセイア』の第11歌にはいわゆる死後の楽園は出てこない。そしてミルトの木も出てこないのである。

2. そしてロンサール

さて、ローマの作家達のミルトについて見てきたが、これからはロンサールの作品を見て行きたい。まず、*« De vous, & de fortune »* と始まる一つの *Élégie* がある。この詩編は男の身分が相手の恋人の身分より低いという身分違いの恋をして、恋人のつれない仕打ちに苦しむ男が歌う詩である⁶¹⁾。あまりにつれない恋人の仕打ちに、男はやがて死後の世界を想像する。この死後の恋人同士の世界の描写は、全162行のこの詩編のうち、後半の129行から162行までを占めている。この後半部の描写はさらに129行から140行までと141行から162行までの二つに分けることができる。前の部分と後の部分では死後の二人の関係に大きな違いが生じているからである。その二人が再会する場所（129行から140行までの描写に相当する部分）は以下のような場所なのである。

Et qu'après notre mort également tous deux
Pussions estre là bas par les champs amoureux,
Afin de vous conter, assis sous les ombrages

61) T.12, p.216, v.23-v.24, *« Ainsi, pour estre moindre & vous superieure / De race & de grandeur, je languis à toute heure »*.

Des myrthes Paphiens, ou de sur les rivages
Qui sont tousjours soufflés d'un Zephyre tresdoux,
Les douleurs qu'en vivant j'auray reçu pour vous. ⁽⁶²⁾

最初の2行は「死んでしまえば身分の差も無くなり、あの世にある恋人達のための場所で一緒に暮らそう」という意味だが、ここには注がついている。その注によれば二人が暮らすのは「aux Enfers dans la région réservée aux amoureux」においてであり、「les champs amoureux」とは「冥界にある恋人達のための場所」であることになる⁽⁶³⁾。しかしこれでは、ローマ作家の例の検討ですで見だが、ティブスの楽園カウェルギリウスの「悲嘆の野」かは区別がつかない。西風が吹くのは、ホメーロスやオウィディウスにも出てきている描写である⁽⁶⁴⁾。この西風の描写という要素によって、ある意味ではティブスの楽園の雰囲気付け加えられてはいる。しかし次の行には「sous les ombrages des myrtes Paphiens」が現れており、ここに付加された注釈は「[...] Il s'agit de la forêt de myrtes, où Virgile a rangé les victimes de l'amour-passion (En. VI, 442 sqq.) [...]」となっており、ウェルギリウスの「悲嘆の野」であることが明確に示されている⁽⁶⁵⁾。引用部の最後の行に示されているように、ここは男が女に死後も依然として生前の恋の苦しみを嘆く場所なのである。さらにこの後に続く140行目までの部分は、ここが「悲嘆の野」であることを裏付ける展開となっている⁽⁶⁶⁾。つまり、ここ「ミルトの森」はウェルギリウス風のミルトの森（＝「悲嘆の野」）なのである。

ところで、先に示した「悲嘆の野」の描写の部分には、ロンサルにおけるウェルギリウスとティブスの関係について、興味を引く注がついている⁽⁶⁷⁾。それによれば、ウェルギ

⁶² T.12, p.221, v.129-v.134.

⁶³ T.12, p.221, note 3, « C.-à-d. : devenus socialement égaux par la mort, nous puissions vivre ensemble aux Enfers dans la région réservée aux amoureux. »

⁶⁴ Ovide, *Ars Amatoria*, 693-694, « Lenibus impulsae Zephyris auraque salubri / Tot generum forndes herbaque summa tremit », « d'une brise salutaire, tous ces feuillages et le sommet des herbes frémissent légèrement ». Cf. Homère, *Odyssée*, VI,568-569.

⁶⁵ T.12, p.221, note 4. この表現の元になった Ovide, *Ars Amatoria*, III, 181. では衣服の色に関する描写で使用されており、この表現自体に「悲嘆の野」を示す意味があるわけではない。

⁶⁶ T.12, p.221, v.135-v.140, « Là, sans peur ny danger, sans soupçon, ny sans crainte, / Sans respect de grandeur, je vous ferai ma plainte, / Et vous ramentrayerai mes premières amours / Qui vives au tombeau se garderont toujours : / Car la mort, tant soit-elle aux amoureux contraire, / De votre beau lien ne me pourra défaire. »

⁶⁷ T.12, p.221, note 5, « Virgile [...] et Pétrarque (*Trionfo d'Am.*, I, 150) ont mis cette forêt de myrtes dans les Champs des pleurs (*lugentes campi*); mais Ronsard, suivant Tibulle, I, 3, 57 sqq. et J. Second, *Bas*, II, l'a placée dans les Champs élyséens, où règne un printemps éternel et où résident les bienheureux. » この注は134行目「Les douleurs qu'en vivant j'aurai reçu pour vous.」に付加されている。

リウスは「ミルトの森」を「悲嘆の野」に置いたが、ロンサルはティブルスの例に倣い、永遠の春が続き、幸福な人々が住むエリュシウムの野「Champs élyséens」に置いたというのである。実際、このすぐ後の141行目から場面描写は一転し、同じ場所でありながら、いかにも楽園という描写の中で幸福な二人が暮らしている様子が描かれている。そしてこの詩は、周囲の亡霊達がこの二人を見て、生きているときは身分違い故に不幸であったけれど、死んでからは平等になり、いまは二人とも幸せで満足している、と言う一節で終わるのだ⁽⁶⁸⁾。この141行目から最後まで描写はあきらかにティブルスの描く恋人達の楽園である。しかし129行から140行までは明らかに「悲嘆の野」である。つまりここは、始めはウェルギリウスの「悲嘆の野」そのもので始まり、最後は「幸運の杜」、あるいはティブルス的な楽園となって終わるという展開になっており、同じ場所を示す描写としては、異なる作家から採ってきた描写の間の移行がうまく行っていない例ととらえられる。しかし、重要なのは、ここで取り上げた注釈が、ロンサルにおける「ミルトの森」に関してウェルギリウスとティブルスを区別してとらえていることである。実は「ミルトの森」に関しては、このように二人の古代作家の描写の区別とロンサルの関係について明確に言及した注釈は少ないのである。

ここでもう一つの例を見てみたい。典拠の区別に言及した注のついた作品のうちの一つに、王の獵犬であった Beaumont を歌った詩 *Prosopopée du Beaumont levrier du Roy & Charon* がある。この詩の中で Beaumont は冥界の番犬ケルベロスに出会った後、「悲嘆の野」と「幸運の杜」の間で、道が二つに分かれた場所に至る。この部分の描写はウェルギリウスにある⁽⁶⁹⁾。その選択の場所で Beaumont は 首尾良く楽園へ続く正しい道を選ぶ⁽⁷⁰⁾。そして Beaumont はさらに奥に進んだ場所で、やはり王の愛犬であった Courte⁽⁷¹⁾ に出会う。

Courte à Beaumont fit l'humble reverence,

Luy demanda des nouvelles de France,

⁶⁸ T.12, p.222, v.157-v.162: « Lors les esprits diront en nous voyant tous deux: / Ceux cy en leur vivant ne furent point heureux / Pour n'estre pas egaux: mais la mort qui egale / Les sceptres aux leviers, comme tresliberale, / (Après avoir souffert sur la terre long temps) / Les a fait icy bas bien heureux & contens. »

⁶⁹ アエネーアースを案内する巫女の言葉である。この場所は「悲嘆の野」と「幸福の杜」の間にある。Virgile, *Aeneis*, VI, 540-543: « Hic locus est, partis ubi se uia findit in ambas: dextera quae Ditis magni sub moenia tendit, hac iter Elysium nobis; at laeva malorum exercet poenas et ad impia Tartara mittit. » Éd. Laumonier, t.14, p.117, v.88-v.90: « L'une conduit au juge Rhadamante, / Et l'autre meîne aux champs delicieux. / Heureux séjour des Espritz precieux. »

⁷⁰ T.14, p.117, v.91-v.92: « Suivant le train d'une si belle voye / Ce franc levrier aux Myrthe se convoye », se convoyer à は se diriger vers の意。ここでは正しい道（楽園へ続く道）を選んだことがミルトの存在によって示される。

⁷¹ T.14, p.110, *Épitaphe de Courte chienne du Roy*.

Puys sont entrez dessoubz les bois myrthés,
Des purs espritz par tropes habités,
Qui comme oyseaux aux aesles emplumées
De bois en bois volent par les ramées,
Francz des soucis, & des maux qui nous font
Porter icy des rides sur le front.⁽⁷²⁾

この一節には、Ici, comme ailleurs, R. s'écarte de la tradition virgilienne pour suivre celle des élégiaques latins. Dans Virgile, la forêt de myrtes abrite les grands amoureux, que les soucis de leur vie poursuivent même après la mort ; c'est la région des *lugentes campi* (*En.* VI, 440 sqq.). Ici, au contraire, nous sommes aux champs élyséens (*Ibid.*, 638 sqq.)⁽⁷³⁾。それによれば、同様な例は他にもあるとした上で、ここではロンサールはウェルギリウスの慣習から離れて、ローマ詩人のエレギア（抒情詩）の慣習に従ったことになっている。ウェルギリウスは「ミルトの森」を「悲嘆の野」に置いたが、ここではそれとは反対に「幸運の杜」に在るのだとしてウェルギリウスの「幸運の杜」への送りが与えられている。ウェルギリウスの冥界の地理上では、すでに「悲嘆の野」は過ぎており、ここが「幸運の杜」（= *Campi Elysii*, *Champs Élysées*）であることは動かない。しかしこの解釈では、恋人達を隠す「ミルトの森」が、「前世の苦悩を引きずっている場所」という属性を抜きにして、そのまま「幸運の杜」に移動したように、そして2匹は恋人同士であるかのように読まねばならない。あるいはティブリス的な極楽にいるかのように読まねばならない。しかし、そうなのだろうか。二匹は確かにミルトの森に入ってゆくのだが、その森は前世の苦悩から解放された幸せな人々が住まう場所である。Courte は単にフランスの最近の出来事を訊ねたにすぎず、Beaumont（雄）と Courte（雌）の二匹は、この「ミルトの森」で生前の愛を語るわけではない。恋を語らう恋人達を隠す「ミルトの森」が「幸運の杜」に移動したわけではないのである。この時、ミルトにはもはや恋人達に関わる属性は無く、ここでは単に楽園の象徴でしかない。

Épithaphe de Jan Martin は建築家で物書きでもあったジャン・マルタンへのエпитаフである。この詩編は、「通りがかりの男」・*Le Chemineur* とジャン・マルタンの「霊」・*Le Genie* との間で交わされた対話の形式で書かれている。その中で「*Le Genie*」が死は誰にでも訪れるものであり、誰も皆等しく冥府の判官ラダマンテウスのもとへ行くのだと述べるが、その

⁷² T.14, p.118, v.107-v.114.

⁷³ T.14, p.118, note 4.

後の「Le Chemineur」の問いかけの部分にミルトがでてくる。

Mais je te pri (di moi) Onbre,
 Es tu là-bas, ou sous l'onbre
 Des beaux myrtes unbrageus,
 Ou dedans le lac fangeus
 Qui de bourbeuse couronne
 Neuf fois l'enfer environne ?
 Ou bien si tu es là haut
 entre ceus où point ne faut
 La lumiere, & où la glace,
 E le chaut n'a point de place? ⁽⁷⁴⁾

後半の4行はキリスト教的な天上界であり、ここにいれば霊は幸せなはずである⁽⁷⁵⁾。もう一方の「lac fangeus」とは地獄を取り巻くステュクス河であり、この河に囲まれた中なのであれば、この霊は少なくとも逃げ出すことのできない冥界にいることになる⁽⁷⁶⁾。そして「sous l'onbre Des beaux myrtes unbrageus」だが、ここは注釈によれば「Le bois des amoureux dans les Enfers païens。」である⁽⁷⁷⁾。たしかにこれで意味が通らないこともないのだが、問題はここがウェルギリウスいう「悲嘆の野」なのか、ティブルス的な楽園「campi Elysii」なのかということである。この後の部分で「Le Genie」が、生きている人間が死後の霊が何をしているか知ろうなどと思わないように、と釘を刺して質問にははっきりとは答ええないのだが⁽⁷⁸⁾、生きている人間にとっては死後の霊が「何処にいるか」という問いよりも、死んだ後に霊は「幸福なのかそれとも苦しんでいるのか」が重要なのである。したがって「悲嘆の野」にいれば生前の愛の苦しみを引きずっているのであり、エリュシウムの野にいるならば苦しみは無いのである。この注ではどちらともとれるのだ。引用後半部の天上界をキリスト教的な極楽として、前半部を苦しみを伴う異教の地獄とすれば、ここは「悲嘆の野」ととらえることになる。このままではどちらとも判読しがたいのだが、先に見た、両

⁷⁴ T.5, p.255, v.65-v.74.

⁷⁵ T.5, p.256, note 3, - Alternative entre deux croyances (païenne et chrétienne). -

⁷⁶ T.5, p.256, note 2, - Souvenir de Virgile, *Géorg.* IV, 478 et 479 : « [...] tardaque palus inamabilis unda Alligat, et novies Styx interfusa coerces » (passage repris dans l'*Énéide*, VI, 438-439). -

⁷⁷ T.5, p.256, note 1.

⁷⁸ T.5, p.256, v.81-v.84, - Tandis que tu es en vie / Pour dieu, Passant, n'aie envie / De savoir que fait ça-bas / L'esprit apres le trépas -.

者を区別する注を念頭に置けば、ここはティブルスのな楽園ととらえることになる。だが、しかし、ここには愛や恋が介在する必要があるようには思われないのである。むしろここは獵犬 Beaumont の例でみたように、ミルトは恋愛抜きの単なる極楽の象徴として読むべきではないだろうか。

ところで、この部分にはさらに二つのソネに送りが付いている¹⁷⁹⁾。一つは 1553 年の『恋愛詩集』に新たに収録されたソネ 68 番であり、もう一つは『エレースへのソネ』に収録されている有名なソネ - *Quand vous serez bien vieille...* - である。

まず、ソネ 68 番では

O moi deus fois, voire trois bienheureus,
S'Amour m'occit, & si avec Tibulle
J'erre là-bas sous le bois amoureux.⁽⁸⁰⁾

という描写であり、ここにはミルトの語は入っていない。だが、ここにやはり同様に注が付いている。その注では -*Quant au « bois amoureux », c'est la forêt de myrtes dont parle Virgile dans sa description des Champs Elyséens, En. VI, 445, où « ceus qui sont mors en aimant demenent leurs amours encore apres leur mort » (Muret).* -⁽⁸¹⁾ という注がついており、ここではウェルギリウスの「悲嘆の野」を示すものとされているのである⁽⁸²⁾。しかし、ここではティブルスと共に行く森なのだから、そこはウェルギリウスの「悲嘆の野」ではあり得ない。ティブルスの幸福なるエリュシウムの野である。

もう一つソネ - *Quand vous serez bien vieille...* - は、年老いた女性がかつて美しかった時の恋を懐かしみ、恋人につれなくなったことを悔やむ話である。

Je seray sous la terre, & fantaume sans os
Par les ombres Myrtheux je prendray mon repos.

79 T.5, p.256, note 1, - Cf. ci-dessus les *Amours*, sonnet LXVIII vers 14. Il revient souvent dans l'œuvre de Ronsard, qui a dit de lui-même, dans un sonnet fameux pour Hélène : *Par les ombres myrteux je prendrai mon repos.* -

80 T.5, p.121, sonnet LXVIII, v.12-v.14.

81 T.5, p.121, note 3.

82 T.5, p.121, note 3 にはペトラルカへの送りのもついている：「La périphrase est calquée sur celle de Pétrarque « nell' amorosa selva » (sestine *A qualunque*, vers 26).」。このペトラルカの詩編ではティブルスは出てこず、「悲嘆の野」として解釈されている。『ペトラルカ カンツォニエーレ』、池田廉訳、名古屋大学出版会、1992。

Vous serez au fouyer une vieille accroupie,
Regrettant mon amour, & vostre fier desdain.⁽⁸³⁾

Laumonier 版の注釈では「 Sous les ombrages de la forêt de myrtes, où se tenaient les grands amoureux aux Champs Élysées. 」となっている⁽⁸⁴⁾。この注をそのまま受け止めれば、「 Je 」は「 Champs Élysées 」に居るのだから、あの世で幸せに暮らしているという話である。ところが、奇妙なことに別の注ではウェルギリウスの「 lugentes campi 」の例としてこのソネへ送りがついている⁽⁸⁵⁾。しかしローマ作家とミルトとの関係を見てきた今では、これらの注には話の合わない部分があることがわかる。ミルトの森はウェルギリウスの「悲嘆の野」にあり、エリュシウムの野（Champs Élysées）あるいは「幸運の杜」に位置しているわけでは無く、さらにはティブルスのエリュシウムの野にはミルトの森が無いことが解っているからである。この注釈ではウェルギリウスの「幸運の杜」 campii clysi 和「悲嘆の野」 lugentes campi、ティブルスのエリュシウムの野が一緒になっていることがわかる。そしてそのような場所は存在しないことも解るのである。

ところで、このソネットの注には「 Cf. ci-dessus la chanson *Plus estroit que la Vigne*, vers 21. 」という他の詩編への送りが付いている⁽⁸⁶⁾。その詩編「*Plus estroit que la Vigne*」もまた「sous les branches Myrtilines」というよく似た表現を含んでいるのだ。

Là morts de trop aimer, sous les branches Myrtilines
Nous voirrons tous les jours
Les Heros pres de nous avec les Heroïnes
Ne parler que d'amours.⁽⁸⁷⁾

この場面だけ読むと、愛が原因で死んだとあるために、「悲嘆の野」であるかのように思えるのだが、この直前にこの「私たち」が Champs Élysées にいることを示す一節がある⁽⁸⁸⁾。さらに後の方には明らかにウェルギリウスの「幸運の杜」、ティブルスのエリュシオンの

⁸³ T.17, p.266, v.9-v.12. Incipit, « Quand vous serez bien vieille... ».

⁸⁴ Laumonier 版の注釈 t.17, p.266, note2.

⁸⁵ T.12, p.221, note 4, « [...] Il s'agit de la forêt de myrtes, où Virgile a rangé les victimes de l'amour-passion (En. VI, 442 sqq). R dira encore dans un sonnet à Hélène : Par les ombres myrteux je prendrai mon repos. »

⁸⁶ T.17, p.266, note 2.

⁸⁷ T.17, p.236, v.21-v.24.

⁸⁸ T.17, p.236, v.17-v.20, « Mais souffrant doucement le joug de ton empire, / Tant soit-il rigoureux, / Dans les champs Elisez une mesme navire / Nous passera tous deux. »

野、さらにはオウィディウスの「黄金の時代」の描写から着想を得たと思える一節もある⁸⁹⁾。いわば、この「ミルトの森（木陰）」は複数の作家から着想を得た幸福な時代や楽園の描写の羅列の中に置かれ、決して「悲嘆の野」にはなり得ない舞台装置の中に置かれているのであり、注釈の導くように「悲嘆の野」の系譜に連なるものとして読むことは困難である。

この部分には「Dans la forêt de myrtes réservée aux grands amoureux. Cf. Virgile, *Enéide*, VI, vers 443-444, et *Bucoliques*, VII, vers 61-64. Plus loin (livre II, XXIV), Ronsard parlera encore des « ombres Myrtheux » »という注が付されているが⁹⁰⁾、「Virgile, *Enéide*, VI, vers 443-444」はウェルギリウスの「悲嘆の野」であり、「ミルトの森」はあるが、上で引用した部分と対応させるには無理がある。「*Bucoliques*, VII, vers 61-64.」は、先に検討している部分であり、ミルトは出てくるが、内容的にはことは関係が無い。「Plus loin (livre II, XXIV), Ronsard parlera encore des « ombres Myrtheux »」は先に見たソネ「Quand vous serez bien vieille...」への送りであり、この場面とは同一視できるものではない。「Dans la forêt de myrtes réservée aux grands amoureux.」は、その後に古典作品への送りがあるにもかかわらず、それらの古典作品には明確な形では存在していない場所であることがわかる。

Épître de Michel Marulle では、ロンサールは、「マリユルはあの世でティブルスと一緒に暮らしている」という。

Il vit là bas avec Tibulle.
Dessus les rives Elysées,
Et sous l'ombre des myrtes vers,
Au bruit des eaux chante ses vers

⁸⁹ T.17, p.237, v.25-v.36, « Tantost nous danserons par les fleurs des rivages / Sous les accords divers, / Tantost laissez du bal, irons sous les ombrages / Des Lauriers toujours verts : / Où le mollet Zephyre en haletant secoué / De souspirs printaniers / Ores les Orangers, ores mignard se joue / Parmi les Citronniers. / Là du plaisant Avril la saison immortelle / Sans eschange se suit : / La terre sans labeur de sa grasse mammelle / Toute chose y produit. - ; p.237, note 1, - Description des Champs Élysées, inspirée des élégiaques latins. V. par ex. Tibulle, *Eleg.*, I, III, vers 57-66; Ovide, *Amores*, III, IX, vers 59-64. - ただし、最後の「Ovide, *Amores*, III, IX, vers 59-64」の指摘はおかしい。ここは Ovide, *Metamorphoseon*, I, 107-112, « Ver erat aeternum placidique tepentibus auris / Mulcebant zephyri natos sine semine flores. / Mox etiam fruges tellus inarata ferebat / Nec renouatus ager gravidis canebat aristis; / Flumina iam lactis, iam flumina nectaris ibant / Flavaque de viridi stillabant ilice mella. -, - *Le printemps était éternel et les paisibles zéphirs caressaient de leurs tièdes haleines les fleurs nées sans semence. Bientôt après, la terre, que nul n'avait labourée, se couvrait de moissons; les champs, sans culture, jaunissaient sous les lourds épis; alors des fleuves de lait, des fleuves de nectar coulaient çà et là et l'yeuse au vert feuillage distillait le miel blond* »であるべきだろう。

⁹⁰ T.17, p.236, note 3.

Entre les ames bien prisées.⁽⁹¹⁾

ここでは後半の3行に関しては、ウェルギリウスの「幸運の杜」の描写の場面にこれによく似た描写が現れる⁽⁹²⁾。その部分にはミルトの語は無く、その代わりに「laurier」月桂樹の語が入っている。しかしこの月桂樹からミルトへの置き換えは、恋人「Néère」を歌った *Epigrammata* という恋愛詩のためであり、恋愛詩人には武勲を表す月桂樹よりもミルトの方がふさわしいのである。このように、ウェルギリウスの要素を持つてはいるが、マリユルはティブルスと暮らしているのだから、その「あの世」は当然ティブルスの描く楽園であることが約束になる。さらに最初に「Elysées」の語が出ているのでティブルスによって描かれた楽園であることは一層確かなものとなる。

さて、この部分には「Dans le bois réservé aux poètes de l'amour.」という注が付いている。二人の詩人は確かに恋愛詩を書いているのだが、これではほとんど何も解らない⁽⁹³⁾。また、同じ注に「Cf. le tome V, pp. 121, note 3 et 256, note 1.」⁽⁹⁴⁾とあるのだが、これはすでに検討した1553年の『恋愛詩集』に新たに収録されたソネ68番と *Epitaphe de Jan Martin* に付された注への送りであり、その注ではさらにソネ「Quand vous serez bien vieille...」へ送られているのだがこれもすでに検討している。これらの注ではいずれもウェルギリウスの「悲嘆の野」を中心に引き上げており、ここには合致しない。

次に取り上げる *Elegie* は副題に「traduite du Grec d'Ergasto」という副題がついており、このErgastoなる作家については不明である旨の注釈がある。内容は、恋人を奪われて、女への愛が理由で死んだ男を哀れむ歌である。

Dormez en doux repos, ô cendre Icarienne,
De sous les myrtes verts votre idole parvienne,
Pour avoir bien aimé : [...]⁽⁹⁵⁾

91 T.6, p.28, v.12-v.16. 「sous l'ombre des myrtes vers」に対してLaumonier版では「Dans le bois réservé aux poètes de l'amour. Cf. le tome V, pp.121, note 3 et 256, note 1-」の注が付いているがこれは少しおかしい。この注はウェルギリウスの「悲嘆の野」を前提としているからだ。特に「des myrtes vers」に関しては他の出典（オウィディウス）が想定できる。

92 Virgile, *Aeneis*, VI, 656-658 : « Conspicit ecce alios dextra laeuaque per herbam uescentis lactumque choro pacana canentis inter odoratum lauri nemus, [...] », « Voici qu'il en aperçoit d'autres, à droite, à gauche, sur l'herbe, prenant leur repas, chantant en chœur un joyeux péan, dans un bois odorant de laurier, [...] ».

93 T.6, p.28, note 4.

94 T.6, p.28, note 4.

95 T.10, p.111, v.41-v.43.

« myrtes verds » という表現そのものはすでに述べたようにオウィディウスに由来するものだが⁹⁶⁾、比喩的には確かにここはいわゆる「ミルトの森」である。この部分には « Quant aux « myrtes verts », c'est le bois réservé dans les Champs Elysées aux ombres des grands amoureux (Virgile, *En.*, VI, 442; Tibulle, I,3,66). » という注が付されているが⁹⁷⁾、この注ではウェルギリウスの「悲嘆の野」とティブルスのエリュシウムを参照先としているので、この両方を視野にいれている。愛が原因で死した恋人達が集う場所、という意味ではここは「悲嘆の野」にふさわしい。だが、ティブルスのエリュシウムの要素が全くないとは言いきれない面がある。その意味では両者を参照先としたのは理解できるが、« Quant aux « myrtes verts », c'est le bois réservé dans les Champs Elysées aux ombres des grands amoureux » という指摘はやはり存在しない場所を示している。

Élégie à Marie でもミルトは出現している。

Puisse arriver, apres l'espace d'un long age,
Qu'un esprit vienne à bas, sous l'amoureux ombrage
Des Myrthes, me conter que les ages n'ont peu
Effacer la clarté qui luist de nostre feu,⁽⁹⁸⁾

« l'amoureux ombrage Des Myrthes » には « C.à.d. aux Enfers, dans la forêt de myrtes réservée aux grands amoureux (Virgile, *En.*, VI, 442; Tibulle, I, 3, 57 sqq.) » という注釈が付されているが⁹⁹⁾、この注はそのまま読めば、ティブルスの参照先を示してはあるものの、該当するのは「悲嘆の野」である。しかしここでは、ミルトの木陰で語られるのは、歳月も消し去ることのできなかった « la clarté qui luist de nostre feu » なのであって、決して恋の恨み辛みではない。しかし、ここで話題になっている世界は、ミルトが恋人達の頭に飾られた単なる一要素でしかないティブルスの世界でもないのである。ここはむしろ古典を踏まえた上で、しかも古典に縛られることなく、「死した恋人達が前世のすばらしい恋（愛）を明るく語り合う幸福な木陰（森）」としてとらえ、ミルトの意味を楽園の象徴としてとらえる必要があるように思える。いわば、ここでロンサルは古典を消化した上で新たな一步を踏み出したと考えてもいいのではないだろうか。

« Quand je devise assis aupres de vous » で始まる *Chanson* では、恋人に墓碑銘に以下のよ

⁹⁶⁾ Ovide, *Fasti*, 4,139, « vos quoque sub viridi myrto iubet ipsa lavari: »

⁹⁷⁾ T.10, p.111, note 3.

⁹⁸⁾ T.10, p.243, v.107-v.110.

⁹⁹⁾ T.10, p.243, note 1.

うに刻んで欲しいと望む一節がある。

Dessus ma tombe engravez mon soucy
 En memorable escrit :
 D'un Vandomois le corps repose icy,
 Sous les Myrtes l'esprit. ⁽¹⁰⁰⁾

この詩編は 1578 年の『エレヌへのソネ』の一つであるから、もちろん恋愛詩人の象徴としての意味もあるが、葬られている人間がこの詩編で熱烈な恋を歌っており、肉体と魂を分けてとらえている以上、- Dans la variante de la strophe final, « Sous les Myrtes » désigne le séjour des âmes des grands amoureux aux Champs Élysées, » ⁽¹⁰¹⁾ という注釈はある意味では正しい。しかし、いままで見てきたことを考慮すると、やはりこの注では曖昧な部分が残っている。ここはやはり「死した恋人達が前世のすばらしい恋（愛）を明るく語り合う幸福な木陰（森）！」という、ロンサール独自の理想郷を設定する必要があるのではないだろうか。

- Ja du prochain hyver je revoiy la tempeste » ⁽¹⁰²⁾ では、以下のような一節がある。

Puis je veux devaller soubs la terre là bas
 Où commande Pluton, la Nuit & le trespas :
 Et là me pourmenant soubs les ombres Myrtines,
 Chercher ton Morvillier & tes deux Aubespines,
 Deux morts en leur vieillesse, & l'autre à qui la main
 De la Parque trop tost trancha le fil humain, ⁽¹⁰³⁾

この部分では「C'est-à-dire dans la forêt de myrtes [P.L.] » ⁽¹⁰⁴⁾ との注が付されているのみである ⁽¹⁰⁵⁾。これまでに見てきたような死後の楽園「Champs Élysées」との関連も示されてい

¹⁰⁰ T.17, p.202, v.43-v.46, variante 84. 最初の 1578 年には - Dessus ma tombe escrivez mon soucy / En lettres grossemment : / Le Vendomois, lequel repos icy, / Mourut en bien aimant. -

¹⁰¹ T.17, p.202, note 3.

¹⁰² T.18, p.36-43, *Les Amors diverses à tres-vertueux seigneur N. De Neuville, Seigneur de Villeroy, secretaire d'État de sa Majesté*.

¹⁰³ T.18, p.41, v.111-v.116.

¹⁰⁴ T.18, p.41, note 2.

¹⁰⁵ この巻が出版されたときにはすでに附字 Paul Laumonier は他界している。この注は遺稿にあったものである。

ない。

« Morvillier » は 1577 年に他界したオルレアン司教のジャン・ド・モルヴィリエ Jean de Morvilliers のことである。「deux Aubespines」は 1567 年に他界したクロード・ド・ローベビヌ Claude de L'Aubespine と 1570 年に 26 歳で死んだその息子のことである⁽¹⁰⁶⁾。文中の所有形容詞は献呈相手のニコラ・ド・ヌーフヴィル Nicolas de Neufville を示している。ニコラ・ド・ヌーフヴィルはクロード・ド・ローベビヌの娘と結婚していたという関係はあるが、ここは明らかに色恋とは無関係である。ここにあるのは、やはり死者の魂が幸福に暮らす死後の楽園なのである。

まとめ

本稿では植物のミルトを大きなテーマとして取り上げ、ローマ古典古代の作家に現れる描写とロンサールにパターン化して現れる表現の関係を考察したものである。考察の過程では、必然的に、Laumonier 版に付された注釈を再度検証することになった。

第 1 章では、ホラティウス、オウィディウス、ティブルス、ウェルギリウスを中心に、植物のミルト myrtus の現れる描写を検討し、ミルトの用いられ方をまとめた。最初に、ミルトの植物としての性質とその受け止められ方、次に聖木・聖花として詩神ムーサ、ミネルヴァ女神、恋の女神ヴィーナスとの結びつきについてまとめている。恋愛や恋愛詩の象徴としての使用法はこのヴィーナス女神との関係により生じている。さらに、額、頸、髪、髪などにミルト巻いて飾りとする習慣とヴィーナス女神との関係により、恋や恋人達が象徴される。ミルトと極楽との関係では、極楽と呼べる場所でミルトが出現するのはティブルスの極楽の描写のみであり、ウェルギリウスでミルトが出てくる場面は「悲嘆の野」と呼ばれ前世の恋の苦悩をひきずる者達が暮らす場所の描写である。ウェルギリウスには「幸運の杜」と呼ばれる極楽の記述があるが、そこでは月桂樹はでてくるがミルトの木は出てこない。ホメーロスの冥府行がテーマになっている『オデュッセイア』の第 11 歌にはいわゆる死後の楽園は出てこない。そしてミルトの木も出てはきていない。

一方、ロンサールにおけるミルトの使用法では、ロンサールにおけるパターン化した表現が、時にウェルギリウスの描く「悲嘆の野」を指し示し、時にはティブルスの描くエリュシオンの野を指し示すが、多くは両者が入り交じっており、「死した恋人達が前世のすばらしい恋（愛）を明るく語り合う幸福な木陰（森）」とでも言うべき、古典作家にはない極楽を指し示していること例があること、さらには単なる「極楽」を示す例があることを明らかにした。

¹⁰⁶ T.18, p.41, note 3; t.15(1), p.136, note 1 et note 2.

また、Laumonier 版の注釈については、古代ローマ作家の作品との関連が詰め切れていない部分があることを指摘している。たとえば Laumonier 版、第 17 巻の注釈の一つに誤りがある可能性を指摘した⁽¹⁰⁷⁾。また、ロンサールの言い回しで 2 度出てくる「les myrtes verds (vers)»「緑のミルト」については Laumonier 版では典拠に関する注釈は無いが、この表現がホラティウス、ティブルス、ウェルギリウスにも無いことから、ロンサールはオウィディウスにある表現を利用した可能性が高いことを指摘した。同様に、第 12 巻に現れる「soubz les ombrages / Des myrthes Paphiens」という表現はオウィディウスの *Ars Amatoria* から採られたものである可能性を指摘している⁽¹⁰⁸⁾。また、これと関連して第 6 巻の注釈に関して疑問を呈している⁽¹⁰⁹⁾。

テキストおよび参考文献

1. *Œuvres Complètes de Ronsard*, éd. Laumonier, S.T.F.M., Librairie NIZET, 1937-1990.
2. *Catullus/Tibullus/Pervigilium Veneris*, 2nd ed., translated by Francis Warre Cornish/ translated by J.P. Postgate/translated by J.W. Mackail. Harvard University Press/ W. Heinemann, 1988. The Loeb classical library.
3. Creore, A.E., *A word-Index to the poetic works of Ronsard*, 2 vol., W.S. Maney and son LTD., Leeds England, 1972.
4. Homère, *L'Odyssée*, texte établi et traduit par Victor BÉRARD, 3 vol., huitième tirage, Les Belles Lettres, 1972.
5. Horace, *Odes et épodes*, texte établi et traduit par F.VILLENEUVE, J.HELLEGOUARC'H, Les Belles Lettres, 1991.
6. Ovide, *Les Métamorphoses*, texte établi et traduit par Georges LAFAYE, sixième tirage, 3.vol., Les Belles Lettres, 1980.
7. Ovide, *L'art d'aimer*, texte établi et traduit par Henri BORNECQUE, septième tirage, Les Belles Lettres, 1983.
8. Ovide, *Les amours*, texte établi et traduit par Henri BORNECQUE, Les Belles Lettres, 1930.

¹⁰⁷ T.17(2), p.237, note 1 の一部。

¹⁰⁸ T.12, p.221, v.131-v.132. Ovide, *Ars Amatoria*, III, 181.

¹⁰⁹ T.6, p.28, note 4.

9. Ovide, *Fasti*, translated by Sir James George FRAZER, 2d edition revised by G. P. GOOLD, Harvard University Press, The loeb classical library.
10. Paul Laumonier, *Ronsard poète lyrique*, Slatkine Reprints, 1972, éd. princeps Hachette, 1932.
11. Teofilo Folengo, *Histoire maccaronique de Merlin Coccae, prototype de Rabelais*, nouv. éd. revue et corr. sur l'éd. de 1606, G. Brunet et P. L. Jacob, Adolphe Delahays Libraire-Éditeur, Paris 1859, reproduction num. BNF, 1995.
12. Tibulle, *Élégies et Les Amours du corpus tibullianum*, texte établi et traduit par Max PONCHONT, Les Belles Lettres, 2003.
13. Virgile, *Énéide(Aeneis)*, texte établi et traduit par Jacques PERRET, troisième tirage, 3 vol., Les Belles Lettres, 1992.
14. Virgile, *Géorgiques*, texte établi et traduit par Paul MAZON, septième tirage, Les Belles Lettres, 1982.
15. Virgile, *Bucoliques*, texte établi et traduit par E. de SANT-DENIS, quatrième tirage, Les Belles Lettres, 1983.
16. ウェルギリウス、『アエネーイス』、泉井久之助訳、岩波文庫、第3刷、1991。
17. ウェルギリウス、『ウェルギリウス 牧歌・農耕詩』、河津千代訳、未来社、初版、1981。
18. オウィディウス、『祭暦』、高橋宏幸訳、叢書アレクサンドリア図書館第一巻、国文社、初版 1994。
19. オウィディウス、『変身物語』、中村善也訳、岩波文庫、1984。
20. カトウルス、ティブルス、プロペルティウス、オウィディウス他、『ローマ恋愛詩人集』、中山恒夫編訳、アウロラ叢書、国文社、1985。
21. ホメロス、『オデュッセイアー』、呉茂一訳、岩波文庫、1979。
22. ホラティウス、『歌章』、藤井昇訳、現代思潮社、1973。
23. ロンサル、『ロンサル詩集』、高田勇訳、青土社、1985。
24. ペトラルカ、『ペトラルカ カンツォニエーレ』、池田廉訳、名古屋大学出版会、1992。

Bois(ombrage) des myrtes chez P. de Ronsard

- « fortunata nemora » ou « lugentes campi » -

Yoshito EMMI

Dans cet article, nous avons traité du rapport entre des descriptions concernant le myrte d'écrivains romains et une quinzaine d'expressions identiques contenant le mot « myrte » chez P. de Ronsard. Il en est résulté la révision de quelques notes de l'édition Laumonier.

Ronsard, à la composition de ces expressions, consulte principalement Horace, Ovide, Tibulle et Virgile. Suivant ces quatre auteurs, le myrte est une plante étroitement liée aux Muses, à Minerve et surtout à la déesse Venus. Cette dernière lui donne le rôle symbolique de l'amour, de la poésie amoureuse et enfin des amoureux, dont le rapport est indiqué par le myrte ornant leurs cheveux ou leurs tempes. De plus, le myrte est un symbole du paradis païen « les Champs Élysées », « Campi Elysii » en latin, dans une description du paradis de Tibulle où l'auteur utilise explicitement le mot « myrtus ». Mais chez Virgile, le myrte n'apparaît pas dans la description de son paradis « fortunata nemora » accompagné du laurier, mais il apparaît dans la description de « lugentes campi », l'endroit où les amoureux se plaignent de leur souffrance d'amour même après la mort.

Ronsard utilise ces expressions identiques contenant le mot myrte pour signifier, en certains cas, « Campi Elysii » de Tibulle et, en d'autres cas, « lugentes campis » de Virgile, mais dans la plupart des cas le myrte signifie un paradis qui est un mélange de ceux de ces deux auteurs. Il y a aussi chez Ronsard des preuves de son originalité : il y décrit en empruntant des descriptions à ces auteurs son paradis original du bois de myrte où les amoureux parlent de leur amour gaiement et heureusement après la mort.

À la fin, cette étude semble nous permettre d'ajouter que « Ovide, Amores, III, IX, vers 59-64 » de la note 1, p.237, t.17 doit être remplacé par « Ovide, Metamorphoseon, I, 107-112 », que des renvois dans la note 4, p.28, t.6 peuvent supposer « lugentes campi » mais il n'est pas impossible de penser aux « Campi Elysii », que les deux expressions « les myrtes verts » et « les myrtes vers » peuvent remonter à un passage d'Ovide et que l'expression « sous les ombrages Des mythes Paphiens » peut venir d'un passage d'*Ars amatoria* d'Ovide.

Bois(ombrage) des myrtes chez P. de Ronsard
- « fortunata nemora » ou « lugentes campi » -

Yoshito EMMI

Études de Langue et Littérature Européennes
Université d'Okayama
25 (2006)